

## いのちの尊厳と「ケアの文化」

### La Dignidad de la Vida y “La Cultura del Cuidado”

宮 武 信 枝

#### 要旨

教皇は毎年「世界平和の日」（1月1日）にメッセージを世界に向けて送ることになっており、教皇フランシスコは、2021年の新年にあたり「平和の道りとしてのケアの文化」をテーマとして発表した。そこでは、全被造物といのちをケアする源としての神、人間が互いにケアする使命、イエスの生涯におけるケア、教会におけるケアの歴史、平等な尊厳を促進するケアの文化の教育と課題などが語られている。このメッセージを契機とし、神が人間イエスとなったというキリスト教の独自性に基づくケアの意味とその類比について考察する。

キーワード：キリスト教的人間観、いのちの尊厳、ケアの文化、病者、平和

#### はじめに

カトリック教会において、教皇は年間の種々の祈願日に向けたメッセージを世界に発信している。そのうち、新年1月1日は「世界平和の日」、2月11日は「世界病者の日」とされ、他にも7月25日「祖父母と高齢者のための世界祈願日」、9月第1日曜日「被造物を大切にす世界祈願日」、9月最終日曜日「世界難民移住移動者の日」、年間第33主日「貧しい人のための世界祈願日」など、各祈願日制定の趣旨がある<sup>1)</sup>。

2021年「世界平和の日」にあたって、現教皇フランシスコは「平和の道りとしてのケアの文化」をテーマに発表した<sup>2)</sup>。メッセージでは、全被造物といのちをケアする源としての神、人間が互いにケアする使命、イエスの生涯におけるケア、教会におけるケアの歴史、平等な尊厳を促進するケアの文化の教育と課題が語られている。「ケア」というテーマを広く平和の促進という目標の達成に貢献する文化として捉え、「世界病者の日」に先立つ「世界平和の日」に向けて扱ったところにユニークさがある。これはすでに、環境保護と統合的エコロジーへの取り組みを扱った社会的回勅『ラウダート・シ』

等に見られ、サブタイトルの「ともに暮らす家を大切に」という日本語訳の「大切に」がまさに「ケア」なのである<sup>3)</sup>。

本稿では、ケアの文化の基礎となる人間といのちの尊厳をふり返り、狭義のケアを受ける病者をめぐる教皇メッセージと、広義におよぶケアの文化のメッセージを読み、神が人間イエスになったというキリスト教の独自性の観点からケアの文化について考察する。

## 1 キリスト教の人間観といのちの尊厳

キリスト教の人間観というとき、旧約聖書・創世記冒頭部分に基づく人間観に、大きく新約聖書全体に基づく人間観が加わったと見ることができる。以下、旧約聖書学者・和田幹男の解説を参考にしながらまとめていく<sup>4)</sup>。

まず、創世記冒頭部分、いわゆる「天地創造」の物語に人間の創造がある。

神は言われた。／「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」／神は御自分にかたどって人を創造された。／神にかたどって創造された。／男と女に創造された。／神は彼らを祝福して言われた。／「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」／神は言われた。／「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」／そのようになった。神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。／夕べがあり、朝があった。第六の日である。(創世記1・26-31)

ここで、人間は、精神性において神のかたどり・似姿であることが記されている。また、5日目までの被造物がすべて文法的に命令形の表現で造られているのに比べ、人間だけは「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」と、神が命令ではない強い思いをこめた決断をもって、自由を与えて産み出したことが表されている。

続く祝福の言葉では、人間が神の祝福によって増え広がり、すべての被造物を気遣って守り、尊敬と感謝の気持ちをもって善のために活用するように神から預かったこと、世界・社会の完成は人間に託され、人間が神からの特別な使命を果たして世界が完成することが語られている<sup>5)</sup>。

神は被造物を一つ一つ「見て、良しとされた」のだが、人間の創造の後は「お造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」と、人間が被造物の中で最良であることが言

われている。親が、わが子の誕生を待ちながらベビーベッドや衣類をはじめひとつひとつ家の中や周囲の環境を整えて準備し、最後に待望の赤ちゃんが生まれて大喜びするようなほほえましい描写である。

創世記の人間の創造には二通りの伝承が入っており、上に続く別の伝承が、いわゆるアダムとエバの物語である——「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」（創世記2・7）。この箇所では、人間は土の塵にすぎずはかないと同時に、尊い命の息を吹き入れられた尊い存在であることが語られている。神は、ひとりひとりの人間を、まるで陶工のように土をこねて形造り、その鼻に命の息を吹き入れて、尊いものに造られた。人間は、物質的には動物と同じく「土の塵」でできた体をもつ無力・限界・弱点・欠点・不足のあるはかない存在である。しかし人間は、神から「命の息」の魂を吹き込まれて神のいのちを受け、理性的魂を持ち、さらに神と対話できるという無限・超越に開かれた存在なのである<sup>6)</sup>。この伝承では、男・アダムが造られた後に女・エバが造られる。

主なる神は言われた。／「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」／……  
主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った。／「ついに、これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉。……」（創世記2・18-23）

ここで、人間の男女が同等・連帯性を持つ統治者であることが描かれている。男性が眠っている間に女性も神が創造し、それも重要な「あばら骨」をもって「骨の骨、肉の肉」と言いうる存在に造られた。つまり、人間は男女とも本質的に神のかたどり・似姿として同等・同質、同じ人間としての尊厳を持ち、互いに補い合い、助け合い、支え合う関わり、連帯性と交わりの中で成長し、生活の営みをもって統治するということである。動物は、家族同然に扱われたり、たとえば警察犬や盲導犬、介助犬のように特殊な能力を発揮したり、特別な愛情や驚異的な才能を現したりということはあるが、人間の真に人格的なパートナーは物や動物ではない。人間は、やはり他の人間とかかわり、さらに神とかかわることで真に人間らしくなっていく。

このように、人間が生きているのは動物的な生命だけではなく、人間の尊厳は、神的ないのちに参与することである。

旧約聖書では、これに続いてアダムとエバの罪、それ以来「原罪」のもとに生まれ、原罪に傷つき、死に至るものとなった人間を語る（創世記2・4b-3・24）。人間は誘惑に負け、幸せを願う神の言葉を束縛・不自由・重荷と考え、神の思いに反し神から離れて良心に背き、悪に傾き、自由を濫用して過ちに陥り、欲望のまま自己中心に生きて自分を閉ざし、孤独で不幸せになっていく。神はそよ風の

ようなデリケートさで人を探し、尋ね、呼びかけるが、人は罪の結果、疑い深くなり、神を怖がって隠れる。人間の男女間の結びつきも動揺し、悪を他人のせい、神のせいにする。結局、人が神の思いから外れ、もとの「神の似姿」、人間本来の幸せを失い、不調和、労苦、苦悩の場へと離れる。女性は命あるものの母になるものの陣痛に苦しみ、人は生きるために一生涯懸命に働くものの土地は不毛といった生活の労苦の末、死んで元の「土」に帰る。人間は、生物的な生命の終わりだけでなく種々の「死」の苦しみを味わうようになった。人間と神の関係はそれ自体にとどまらず、人間同士の関係、人間と自然や他の被造物との関係にもつながっている。神と人間の関わりの断絶は、人間相互のきずなの乱れ・関わりの断絶、自然や他の被造物との調和の破壊になっていく<sup>7)</sup>。しかし、神は人間の恥ずかしさを覆ったように、自分が造った人間への「親」としての配慮、優しさを失わずに守っていく<sup>8)</sup>。

以上に、新約聖書のキリスト教的根拠に基づく人間の尊厳が加わってくる。人間は、神が贖った「神の子」という新しい人間観である。人間は創造主である神とのかかわりの中で、神的ないのちを受けた神の子とされるが、キリスト教ではさらに、神がご自分の独り子さえ惜しまないほどかけがえのない者として愛している神の子と呼ぶ。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。(ヨハネによる福音書3・16-17)

このような人間観といのちの尊厳に関して、「人間のいのちの新しい文化」を呼びかけたヨハネ・パウロ2世回勅『いのちの福音』など多くの教会公文書があるが、ここでは、一つの実例を挙げたい。日本最初のハンセン病療養所神山復生病院における6代目院長岩下壮一師<sup>9)</sup>のエピソードで、「火事場」という危機の時とっさに、これまで述べた人間観が説得力をもって語られ訴えかけてくる。以前拙稿で扱ったことのある引用だが、再掲したい。岩下と直に接する機会はなかったものの彼が設立したカトリック研究会に戦後参加し、しばしば神山復生病院にも慰問していた今道友信（哲学者、1922～2012年）が記しているものである。岩下病院長時代、病舎の西20メートルほど離れた作業場に火事があった時の青年部責任者であった患者から聞いた確かな話という。

火が木造の病舎に燃え移れば、その中央にある聖堂にも火は及ぶであろう。青年部の責任者であった藤島さんは患者の避難が重症患者の運搬を含めて組織的に進んでおり、看護婦たちも敏速に患者たちを励まし、誘導しているのを見届けると、聖堂に走った。するとそこは岩下神父が病院の重要書類を入れた鞆を片手に、もう一方の手で三、四人の患者たちの背中を軽く押すように、

まさに聖堂から追い出そうとしているような光景だった。「神父様、御聖体はあそこにあのままで、聖書もあのままで、いいのですか」。…「早く出る。神さまがお創りになったもので、神さまが一番大事にされているのは君たち人間の命だ。早く逃げるんだ」貴族的で柔和でどなり散らすことなどなかった知性の人が、藤島さんの胸を鞆を持った手の肘で押し飛ばすようにして戸外へ出し、一同の一番後から、足を少し痛めていた神父も足をひきずるようにして外に避難した。<sup>10)</sup>

結局、幸いにも全員避難して鎮火、病舎も聖堂も冠水せず、岩下は皆とともに聖堂に集まった。岩下は全員無事であったことを神に感謝した後、多くの患者たちの誰もが聖堂の聖体や聖書を重視したという純朴、一途な心を褒めたうえで、人の命は、聖体、聖書と比較できない重さをもっていることを強い語気で指摘したという。

この聖堂、病舎、庭園一切を含めたこの土地、建物、およびそこに含まれる一切のものの中で、最も大事なものは何か。それだけはどんなことがあっても救い出さなければならぬ。それは何か。それは天主が創造なさった人間の命だ。そしてイエス・キリストが人類のために十字架につけられて死んだその人類の中に君たちが含まれているのだ。絶対に捨てててならないのは君たち自身のひとりひとりの命だ。二度とこのような危険がないことを祈るが、火事であれ、地震であれ、何であれ、この病院に何か危険が迫ったときは、君たち自身が助け合って君たち自身を救うために避難するようにしなければならない。お互い同士を見捨てることなく、助け合って避難することが大事なのだ。君たちの命こそ神の創造したもので、またキリストが救ったもので、かけがえがないものである。聖堂にある一切のものも大切にすべきだが、これらはみな人工のものであり、君たちひとりひとりの命に比べれば軽いものだ。<sup>11)</sup>

聖書は創造主であり生ける神の言葉であり、また聖堂の聖櫃の中に安置されている聖体は確かに生ける神キリストの体であるが、「キリストはその兄弟のために死んでくださった」（ローマの信徒への手紙 14・15）のである。「人工のもの」という岩下の言い方は、次元の違いを際立たせる対比、誇張表現とも考えられ、眼前の生身の人間の命の重み、そして、そこに神の創造と贖いを感じ取る心の表現といえる。岩下が聖堂から患者たちを追い出した時のとっさの言葉、また鎮火後の言葉は、キリスト教信仰の核心とは何かの明確な答えになっている。

今道は、岩下のこのエピソードを「キリスト教徒が絶対に捨ててはならないもの…キリスト教の信仰の中心にあるものは何か」と問いかけた中で述べており、キリスト教における人間観といのちの尊厳を明確に表現したものとなっている。



この時多くの患者たちは涙にむせいだという。業病として忌まれ、故郷にも再び入ることもかなわず、家族のために姓名まで変えて、行方知らずと偽って世を忍んで生きていた患者が多かった時代だからでもあろうが、自分たちの命が、どれほど病み崩れていても、世にそれにまさる大事なものは無いのだ、と改めて聞かされたことは、身を揺るがし、心に沁みる感動を喚んだのである。キリスト教徒がどのようなことがあっても捨ててはならないもの、それは神が創り、キリストがそのために十字架につけられた人間の命なのであり、それは自他を含めて、可能な限り救わなければならない、絶対に捨ててはならない最高の価値のあるものなのである。<sup>12)</sup>

この岩下の言葉は、本稿の主題とするキリスト教における人間の尊厳と、メッセージ「平和の道としてのケアの文化」にある全被造物といのちをケアする神、イエスによるケア、人間が互いにケアする使命が的確に含まれ強調された内容となっている。

## 2 教皇メッセージと「ケア」

本章では、狭義のケアの対象である病者をめぐる主要な「世界病者の日」メッセージを概観し、まずその制定の契機になった教皇書簡に触れ、2021年「世界平和の日」教皇メッセージ「平和の道としてのケアの文化」を省察する。

### (1) 教皇ヨハネ・パウロ2世使徒的書簡『サルヴィフィチ・ドロリス』

1984年2月11日、カトリック教会「贖いの特別聖年」中の「ルルドの聖母」の記念日付で、当時の教皇ヨハネ・パウロ2世（1920年ポーランド～2005年4月2日バチカン）は、使徒的書簡『サルヴィフィチ・ドロリス（救いをもたらす苦しみ）——苦しみのキリスト教的意味——』を發布した<sup>13)</sup>。人が苦しむ原因は、もちろん病気だけでなく種々の災害、事故・事件、飢餓、戦争・紛争、現在のよ様な感染症等多数あり、理由も現実も多様、複雑であろう。ただ、病気に伴う肉体的・精神的苦しみの体験は、誰にも自他ともにより身近で、苦しみの諸相が大なり小なりより明らかに表面化する。医療の分野は客観的現実としてよく探究され研究されていることもあり、この書簡がまず病苦を念頭に置いていることは「ルルドの聖母」にちなんだことにも表れている<sup>14)</sup>。なお、この使徒的書簡発表からさかのぼる1981年2月にヨハネ・パウロ2世は教皇として初来日、その3か月後5月13日には一般謁見中に狙撃されて負傷したことを想起しておきたい。生命の危険と身体的・精神的に大きな苦痛を受け、幸いに適切なケアを受けて回復したという体験を経て3年後の書簡ということになる。一定の後遺症があったとされてはいるものの、在位は2005年4月の帰天まで26年の長期にわたり、世界中の司牧旅行も驚異的なレベルで行い「空飛ぶ教皇」と呼ばれた。

『サルヴィフィチ・ドローリス』は、慣例のとおり文書の冒頭語句をラテン語で表現したタイトルであり、また文書全体の趣旨をひと言で総括したものにもなっている。翻訳出版時、本文冒頭では「苦しみの持つ救いの力」と訳され<sup>15)</sup>、「苦しみのキリスト教的意味」としてサブタイトルとされている。つまり、この書簡のテーマは救いという観点から見た苦しみであり、「ケア」自体が主題というわけではない。

確かに、第4章「イエス・キリスト」の中では特に第16項で、苦しんでいる人々に近づいて救いの業を行ったイエスの生き方を扱い<sup>16)</sup>、また第7章は「善きサマリア人」と題してたとえ話を考察し、苦しむ隣人に奉仕する具体的な活動にも言及している<sup>17)</sup>。しかし、この書簡は、対症療法的に病者をどうケアするかという以上に、病者自身とまわりの人々が、苦しみを単なる苦しみでなく人間的・超自然的意味を帯びた苦しみとして受けとめうる言わば「霊的ケア」、さらに「全人的ケア」に関わることである。すなわち、最終章の結びでは、「真に超自然的にして、同時に、人間的な苦しみの意味」について、「超自然的というのは、世界の贖いの神的秘義に根ざしているからであり、同時に、人間的というのは、その苦しみの中で、人間は、自分の人間性、その尊厳、また自分の使命などを発見するからです」とまとめている<sup>18)</sup>。

## (2) 「世界病者の日」 教皇メッセージ

### ① 教皇ヨハネ・パウロ2世（第264代、在位1978年10月16日～2005年4月2日、2013年列聖）

教皇ヨハネ・パウロ2世は、前項『サルヴィフィチ・ドローリス——苦しみのキリスト教的意味——』発表の翌年1985年2月11日には自発教令「ドレンティウム・ホミヌム（人間の苦しみ）」を公布し、のちに教皇庁医療使徒職評議会となった委員会を設立した<sup>19)</sup>。その後、1992年5月13日付、つまり「ルルドの聖母」としばしば並列される「ファティマの聖母」の記念日であり自らが1981年に狙撃された日付で「世界病者の日制定の書簡」を発表、教皇はこの日について、「教会の善のために祈り、分かち合い、自らの痛みを差し出す特別な時です。それはまた、受難と死と復活によって人類に救いをもたらしたキリストのみ顔を、苦しんでいる兄弟姉妹の顔の中に見いだすようすべての人に呼びかける日でもあります」と説いた<sup>20)</sup>。「世界病者の日」は、病者がふさわしい援助を受けられるように、また苦しんでいる人が自らの苦しみの意味を受け止めていくための必要な助けを得られるように、カトリック医療関係者だけでなく広く社会一般に訴え、医療使徒職組織の設立、ボランティア活動の支援、医療関係者の倫理的霊的養成、病者や苦しんでいる人への宗教的な助けなども重要な課題と再認識する日である<sup>21)</sup>。

同書簡を受けた初の「世界病者の日」は1993年2月11日にルルドで記念され、翌年からこの日に向けた教皇メッセージが発表されるようになった。したがって、「世界病者の日」として初の教皇メッセージは1994年のものである。この年は、聖書から「キリストは、ご自身で苦難を担われた」という

言葉と「救いをもたらす苦痛」のテーマのもとに、次の呼びかけで始まっている。

心身に人類の苦しみのしるしを担っておられる兄弟、姉妹の皆さん……わたしは、あなた方一人ひとりが地球上のどこにおられるにしても、病者を「助け、いやされた」(使徒 10・38) イエス・キリストのみ名によって祝福するために、皆さんと出会うことを願っています。わたしは、あなた方の苦しみを和らげるためにあなた方のそばに立ち、あなた方の勇気を支え、希望をはぐくみたいと願っています。<sup>22)</sup>

全体に『サルヴィフィチ・ドロリス——苦しみのキリスト教的意味——』を引用しながら書かれ、最終部分では、ケアを担う医療従事者、医者、看護婦、看護師、チャプレン、修道女、技術職員、管理職員、ソーシャルワーカー、ボランティアが、「善きサマリア人のように……病者や苦しんでいる人に近づき、仕えておられ……何よりもまず、そして常に、人間として彼らの尊厳を尊敬し、信仰の目をもって、彼らの中で苦しむイエスの存在を認めておられ」とし<sup>23)</sup>、その貢献に心を加え、人間性を与えることができると励ます。さらに保健政策や健康に関する諸問題に取り組むことを諸国の指導者に懇願し、最後にもう一度、「親愛なる病者の皆さん。落胆したり悲観主義に陥ることなく、信仰に支えられて、あらゆる形で悪に立ち向かってください」と励まし、「病者の皆さん、医療に従事している方々、そして苦しむ人に奉仕しているすべての人に、恵みと平和、救いと健康、活力に満ちたいのち、倦むことのない献身、そして絶えることのない希望を祈ります」と締めくくる<sup>24)</sup>。

前節の『サルヴィフィチ・ドロリス——苦しみのキリスト教的意味——』も、それを多く引用したこのメッセージも、どちらかと言えばケアされる病者の側に向けられている印象を受ける。先述のように、狙撃事件の負傷と苦痛、ケアを受け回復した体験の記憶がまだ新しく生かされたことも考えられよう。

## ② 教皇ベネディクト 16 世 (第 265 代、在位 2005 年 4 月 19 日～2013 年 2 月 28 日)

第 21 回世界病者の日は、教皇ベネディクト 16 世によって前もって 2013 年 1 月 2 日にメッセージが書かれ、2 月 11 日に記念されたのだが、実にこの日は、教皇が枢機卿会議において高齢を理由に突然辞意を表明した歴史的な日となった。

教皇ベネディクト 16 世によるこの最後の世界病者の日メッセージは、「親愛なる友人の皆様、わたしはこの日、病気や苦難のために医療機関や自宅で試練の時を過ごしている皆様のとりのわけ近くにいると感じます」という、後から穿って読み得るような言葉と、第 2 バチカン公会議からの「皆様は、独りきりでも、離ればなれでも、見捨てられているのでも、無益な人でもありません。皆様はキリストに呼ばれ、キリストの生きた似姿となっているのです」という励ましのメッセージで始められてい



る。そして、自身の回勅『希望による救い』を引用しながら、「わたしたちは苦しみを避け、苦しみから逃れることによっていやされるのではありません。むしろわたしたちがいやされるのは、苦しみを受け入れ、苦しみを通して成長し、キリストと一致することに意味を見いだすことによってです。キリストは限りない愛をもって苦しまれたからです」<sup>25)</sup>と述べる。

続いて、病者が自らの苦しみの人間的、霊的な意味を理解するのを助け、病者の模範や励ましとなった教会史上の人物を例示し、最後は特に「カトリック系の医療機関、市民社会、教区、キリスト教共同体、病者への司牧を行う修道会、医療従事者組織、ボランティアの皆様」にと、感謝と励ましを伝えている<sup>26)</sup>。

### ③ 教皇フランシスコ（第266代、在位2013年3月13日～現在）

教皇フランシスコは、教会が「野戦病院」として人々をケアすべきことを早くからたびたび強調していた<sup>27)</sup>。この用語は、病者を含めて広範な意味での人々のケアである。

2014年以降が現教皇フランシスコによる世界病者の日メッセージであり、毎回のテーマと掲げられている聖書の言葉を列挙すると、気づくことがある——「信仰と愛『わたしたちも兄弟のためにいのちを捨てるべきです』（一ヨハネ3・16）」、「心の知恵『わたしは見えない人の目となり、歩けない人の足となった』（ヨブ記29・15）」、「マリアのように、いつくしみ深いイエスに自らをゆだねる『この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください』（ヨハネ2・5）」、「神が成し遂げられたことへの驚き『力あるかたが、わたしに偉大なことをなさいましたから』（ルカ1・49）」、「教会の母——『ごらんなさい。あなたの子です……見なさい。あなたの母です。そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った』（ヨハネ19・26－27）」、「『ただで受けたのだから、ただで与えなさい』（マタイ10・8）」、「『疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう』（マタイ11・28）」、そして2021年『「あなたがたの師は一人だけで、あとは皆兄弟なのだ』（マタイ23・8）病者へのケアの基盤である信頼関係」。これらの標語には、どちらかと言えばケアする側への呼びかけが多く感じられる。

以下、この中から特別な意味合いがあると思われる年のメッセージを取り上げる。

2014年は教皇フランシスコによる初の世界病者の日メッセージであり、「わたしは病気で苦しんでいる人々と、彼らを助け、気づかう人々にとりわけ目を向けます」という言葉で始まる。病者には「苦しんでいるキリストの姿」を見出して力づけ、病者に献身する人々には「すべての苦しむ人のよいサマリア人であるキリスト」と一致するよう促している<sup>28)</sup>。病者と苦しむキリストとの一致というテーマは、前述『サルヴィフィチ・ドロリス——苦しみのキリスト教的意味——』の中心メッセージになっていた。これも穿った見方かもしれないが、背景として、教皇フランシスコ自身の若いころの闘病体験も想起しうる。現教皇フランシスコ、ホルヘ・マリオ・ベルゴリオは、神学校からイエズス会

の修練院に入る前の21歳の時、原因不明の重度の肺炎を患って手術で右肺上部の一部を切除し、死に直面した経験を持つ。病床で真に勇気づけられ安らぎを与えられたのは、初聖体を準備してくれた旧知の修道女の言葉、「あなたは今、イエスさまと同じ体験をしているのよ」だったという。肺機能が低下したが、日常生活に支障はない。ただ、「のちに宣教師として日本にいきたくなりましてね。昔から名の知られたイエズス会士が活躍したのが日本だったからですが、若い時分に患った病気が原因で健康診断をパスできなかった」と語る<sup>29)</sup>。

2017年は世界病者の日制定25周年ということで再びルルドで記念され、前後に祈りの集い・感謝の祭儀・病者の塗油・病者との分かち合い・生命倫理と神学に関する司牧ワークショップ等も開催された年である。そこで、メッセージはまず世界病者の日制定にいたる流れと意義について1985年の自発教令に言及しながらまとめられている。

この日は1992年にわたしの先任者である聖ヨハネ・パウロ二世によって制定され、世界病者の日は病者だけでなく、より広い意味ですべての苦しんでいる人の状況にとりわけ目を向ける機会です。それはまた、家族や医療従事者、ボランティアの人々など、病者のために尽くしている人々が、病に苦しむ兄弟姉妹に寄り添うという召命を与えてくださったことを神に感謝する機会でもあります。また、この日を祝うことにより、もっとも小さくされた人々、病者、苦しんでいる人々、疎外されている人々、社会の周縁に追いやられている人々への奉仕という、教会の使命の根本的な側面をさらに十分に実践するために必要な霊的な力が、教会の中で刷新されます（教皇ヨハネ・パウロ二世、自発教令「ドレンティウム・ホミニム」1985年2月11日、1参照）<sup>30)</sup>

続いて、「ルルドの聖母」の記念日の起源となった出来事と聖ベルナデッタの生き方を描く。終わりには、「いのちと健康と環境を大切にする文化の普及に貢献するための新たな活力を、わたしたちが得ることができますように。また、とりわけ生命倫理上の問題に正しく対処し、弱いものと環境を守ることを通して、人間の十全性と尊厳を尊重するために尽くすのに必要な革新的な力を、わたしたちが見いだすことができますように」と祈り、のちにケアの文化と呼ぶ内容がすでに込められている。

2019年は世界病者の日の式典がインドのコルカタで行われることもあり、「貧しい人と病者への神の愛を目に見えるかたちで示した、愛のわざの模範であるコルカタの聖マザー・テレサの姿を、喜びと称賛のうちに思い起こしたい」と、2016年9月4日に行った列聖式ミサ説教を引用している。

マザー・テレサは全生涯にわたり、生まれる前のいのち、世間から見放され見捨てられたいのちといった、人間のいのちを受け入れ守ることを通して、すべての人が神のいつくしみを手にできるよう惜しみなく分け与えました。……衰弱しきって死にかけている人の前にかがみ、道の端

に連れて行って死を迎えさせてあげました。神がその人たちにお与えになった尊厳を認めていたからです。彼女は、この世の権力者の前で声を上げ、権力者自身が生み出す貧困という犯罪……に対する彼らの責任を自覚させようとししました。マザー・テレサにとっていつくしみは、彼女の働きのすべてに味をつける『塩』であり、貧困と苦しみのために涙も枯れ果てた人の闇を照らす『光』でもありました。都市の周辺部と、実存的辺境に対して彼女が行った宣教は、神が極限の貧困にあえぐ人々に寄り添っておられることを雄弁に語るあかしとして、今の時代にも生き続けています。<sup>31)</sup>

2020年・2021年2月の世界病者の日はいわゆるコロナ禍のさ中になったが、2020年のメッセージは前もって1月3日に書かれており<sup>32)</sup>、イタリアでは感染拡大する前だったことになる。2021年は長引くパンデミック下、「ケアが施される場や家庭、共同体の中におられる病者と彼らをケアする人……なかでも、新型コロナウイルス感染症のパンデミックのために苦しんでいる世界中の人々のことを思います。わたしはすべての人に、とりわけもっとも貧しい人、隅に追いやられた人に心を寄せるとともに、教会による配慮と愛情を示すことを約束します」というはじめの言葉で発信された。教皇フランシスコは、パンデミックに苦しむ世界に向けて種々の機会に祈りや具体的な支援を行っているが、このメッセージにも次のようにしたためている。

病には必ず顔がありますが、それは一つだけではありません。病者一人ひとりの顔、無視され、疎外されていると感じている人、基本的人権を認めない社会的不正義の犠牲者の顔もあります（回勅『フラテッリ・トゥッティ』22参照）。このパンデミックは、医療体制の多くの不備と、病者へのケアの不足を露わにしました。高齢者や、もっとも弱く、身を守ることもできない人が、必ずしもケアを受けられるわけではなく、不公平な形でしか受けられないことも珍しくありません。この状態を引き起こしたのは、政治的決断であり、資源の管理方法、責任を負う人々の行いです。病者のケアと看護に資源を投じることは、健康を主要な共通善と捉える原則に結びついた優先事項です。このパンデミックはまた、医療従事者、ボランティア、労働者、司祭、修道者の献身と寛大さも浮き彫りにしました。彼らは、専門的技術、犠牲的精神、責任感、隣人愛をもって、大勢の病者とその家族を助け、ケアし、慰め、仕えてきました。黙って患者の痛みを引き受け、その顔を見守ることを選んだ人々、ともに同じ人間家族に属する隣人だと感じている人々です。<sup>33)</sup>

続いて、テーマ「病者へのケアの基盤である信頼関係」について現実的、具体的な言及がある。

治療を効果的にするには、病者への総体的なアプローチを可能にする、かかわりという要素が

欠かせません。この要素を強めることは、医師、看護師、専門家、ボランティアが、苦しんでいる人のケアを引き受け、治療の過程において、信頼に基づく人間関係に助けられながら、患者に寄り添うのに役立ちます（教皇庁保健従事者評議会「保健従事者への新指針（2016年）」4参照）。ですから大切なことは、ケアを必要とする人と、ケアする人の間で契約を交わすことです。その契約は、相互の信頼と尊重、誠実さ、役立ちたいという意欲に根差したものでなくてはなりません。それにより、あらゆる自己防御の壁を乗り越え、患者の尊厳を中心に据え、医療従事者の専門性を保護し、患者の家族と良好な関係を保つことができるのです。<sup>34)</sup>

教皇フランシスコは、2021年このメッセージから半年余り後7月4日から14日まで、結腸の手術のためローマの病院に入院してこの信頼関係を実感する体験をし、退院後にお礼の手紙を送っている。その中で、まず「家族」のような「心のこもった配慮」と「兄弟愛に基づく受け入れの精神」に感謝を表し、「健康のためのケアにおける、人間的な感受性、専門的なプロフェッショナル性の大切さを自ら体験した」と記し、「毎日、大勢の人々が希望や不安を抱えて訪れる」病院で出会った様々な人々の「多くの顔、ストーリー、苦しみの状況」を心に留めたことを述べた。そして、病院関係者に「皆さん一人ひとりの仕事は、デリケートで努力を要するだけでなく、病者をとおしてイエスの傷ついた体に触れるという、いつくしみの業でもある」ことから、「統合的なケアと、試練の中になぐさめと希望をもたらすことのできる人間的配慮をとおして、体だけでなく、心をもいやす」姿勢をこれからも持ち続けて欲しいと望んだ<sup>35)</sup>。

### **(3) 2021年「世界平和の日」教皇メッセージ「平和の道のりとしてのケアの文化」**

1968年1月1日、当時の教皇パウロ6世は、ベトナム戦争が激化するなか平和のために特別な祈りをささげるよう呼びかけた。以来、全世界のカトリック教会は毎年1月1日を「世界平和の日」とし、戦争や分裂、憎しみや飢餓などのない平和な世界が来るように祈っている<sup>36)</sup>。

教皇フランシスコが、2021年に「ケア」というテーマを「世界病者の日」に先立ち広く「世界平和の日」に向けて扱ったことをはじめに述べた。前年2020年から決定的となった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による重大な健康危機は、もはや一つの病気、感染症の問題にとどまらない。「多分野にまたがる世界的な現象となり、気候、食糧、経済、移住などにおける相互に密接に結びついた危機をいっそう深刻化させ、極度の苦痛と困難を引き起こし」、さらに「悲しいことに、さまざまな人々のナショナリズム、人種差別、外国人嫌悪、さらには死と破壊をもたらす戦争や紛争が、新たに勢いを増し」<sup>37)</sup>、平和の脅威にまで至っている現実を見据えたものといえる。

「平和への道のりとしてのケアの文化」と題したメッセージの中で、教皇は最初にコロナ罹患者と家族・遺族、失業者への思いを込め、また医療従事者の愛と連帯への敬意を表す。



わたしがまず思うのは、家族や愛する人を亡くした人、さらには仕事を失った人たちのことです。そして、医師、看護師、薬剤師、研究者、ボランティア、チャプレン、病院や保健機関の職員のことをとくに思い浮かべます。彼らは、患者に付き添い、その苦しみを和らげ、いのちを救うために、多大な苦勞と犠牲をもって、いのちがけで全力を尽くし、今も働き続けています。<sup>38)</sup>

また「政治指導者と民間企業に対し、病者と極めて弱く貧しい人すべてを支えるために、COVID-19のワクチンと必要不可欠な技術を確保すべく、適切な措置を講じるよう、あらためて求め」つつ、メッセージのテーマを提示している。

この一年の間に人類の歩みに刻まれたこうした出来事は、兄弟愛に満ちた関係に基づいた社会を築くには、互いをケアし、被造物を大切にすることが、いかに重要であるかを教えてくれます。ですから、このメッセージのテーマを「平和への道のりとしてのケアの文化」としました。今日、はびこっている無関心の文化、使い捨ての文化、対立の文化に打ち勝つための、ケアの文化です。<sup>39)</sup>

続いてケアの文化の諸側面が解説されており、以下、その要点を把握していく。

第2項「創造主なる神——ケアという人間の使命の源」では、旧約聖書の創世記からアダムの物語、カインとアベルの物語をもとに、神が人間を信頼し全被造物の主人・管理者としたことが、「大地を保護し、いのちを支える力を維持させる」、ケアするという人間の使命の源であるとする。そして人間は、「あらゆるものはつながり合っているという確信、……自分たち自身のいのちを真に気遣い、自然とのかわりをも真に気遣うことは、友愛、正義、他者への誠実と不可分の関係にあるという確信」を共有すると述べる<sup>40)</sup>。

第3項「創造主なる神——ケアの模範」では、神にかたどり似せて造られた人間のいのちの不可侵な尊厳を確認し、被造物をケアする模範として、神がとりわけ貧しい人、最も弱い人を大切にするという正義を示している<sup>41)</sup>。

第4項は「イエスの公生活におけるケア」として、イエスが「あわれみをもって病者のからだと心に触れ、いやされ……罪人をゆるし、新たな人生をお与えになり」、「傷ついた人にかがみこみ、傷の手当をし、介抱するよいサマリア人」となって前項の神のケアを体現した姿を挙げる。そして、「その使命の頂点として、十字架上でご自分をささげ、罪と死への隷属からわたしたちを解放することにより、わたしたちへのケアの究極のあかしを示しておられ」ることを述べる<sup>42)</sup>。

第5項「イエスの弟子の人生におけるケアの文化」では、イエスの生涯に倣った弟子たちおよび初代教会の共同体が「もっとも弱い人々の世話をする」など霊的・身体的な慈善のわざを行っていった



こと、そして「人間の苦しみを和らげるために、病院、貧しい人の避難所、養護施設や孤児院、ホスピスなど、多くの施設が設立され」、歴史の中でケアの文化が始まっていった流れを描いている<sup>43)</sup>。

第6項では、初代教会における奉仕職（ディアコニア）が、「人間一人ひとりの尊厳の促進、貧しい人や身を守るすべのない人との連帯、共通善の追求、被造物の保護」といった教会の社会教説に発展してきたことを述べ<sup>44)</sup>、「ケアの文化の基礎である教会の社会教説の諸原理」として以下の項目を挙げている。

「各人の尊厳と権利を促進するケア」は、キリスト教の中で生まれ深められる人間の概念は全人的発展を追求する助けとなり、一人ひとりの人間自身が目的として皆が尊厳において平等であり、家族、共同体、社会の中でともに生きるよう造られていることを表す。「共通善のケア」は、COVID-19のパンデミックによっても明らかになったように、社会的、政治的、経済的な生活のあらゆる側面において、人類家族全体への影響を考慮して計画、努力するものである。「連帯によるケア」は、神から等しくいのちに招かれている隣人、旅の同伴者として他者を愛する確固とした決意と具体的な表れである。「被造物のケアと保護」は、すべての被造物が互いに結びついていることを深く認識し、人間がともに暮らす家である地球と貧しい人をケアするための有効な手段を生み出すことを含む。仲間である人間に対する優しさや共感や配慮があるとき人間以外の自然との親しい交わりの感覚は本物となり、平和、正義、被造界の保全は、完全に相互接続した三つのテーマであるとする<sup>45)</sup>。

第7項において、これらの社会原理は、「真に人間的な方向性」をたどるために「共通のルートを指し示す羅針盤」であり、ケアの文化の促進に欠かせないこと、「それによって、各人の価値と尊厳が尊重され、共通善のために連帯して協力し、貧困や病気、奴隷状態、差別、紛争により苦しむ人の痛みを和らげることができる」ことを訴える<sup>46)</sup>。

ケアの文化の促進には一定の教育プロセスが必要であり、第8項「ケアの文化の教育のために」では、それを担うものとして、まず「社会の自然かつ基礎的な集団単位であり、かかわりの中で互いに尊重し合うことを学ぶ場」である家庭を挙げる。続いて家庭と協力する学校、大学、ソーシャル・コミュニケーションを挙げ、「個々人、言語、民族、宗教上の各共同体、各国民の尊厳、さらには、それらに由来する基本的な権利に対する尊厳に基づいた価値体系を伝えるよう」求めている。そして、ほとんどの宗教、特に宗教指導者は、「連帯、相違の尊重、さらには、もっとも弱い立場にある兄弟姉妹を受け入れ、ケアすることの重要性を信者と社会に伝えることで、不可欠な役割を果たす」ことができるとする。さらに、公職にある政府間・民間の国際的な組織の職員、教育・研究各分野の関係者に、「さらに開かれ、包含的で、傾聴と建設的な対話、相互理解を伴う教育を行うという目標を達成できるよう」呼びかけている<sup>47)</sup>。

最終の第9項は「ケアの文化なくして平和はありません」と題し、ケアの文化が平和を築くための特別な道であり、「すべての人の尊厳と善を保護し促進するための、皆が参加することを前提とする、

共通の連帯的な責務であり、関心をもち、目を向け、共感し、和解し、いやし、互いを尊重し受け入れる意欲」でもあることを強調して締めくくっている<sup>48)</sup>。

以上、「平和への道のりとしてのケアの文化」のメッセージが「世界平和の日」に扱われたことでもわかるとおり、ただ病者のケアにとどまらず、社会教説、環境教説のテーマに及ぶものとなっている。実際、出典・参照資料は近年のものが多く、特に自身の回勅『ラウダート・シ』とともに、直近の2020年10月3日付アッシジの聖フランシスコの墓前で署名し翌日発布された兄弟愛と社会的友愛についての回勅『フラテッリ・トゥッティ（兄弟の皆さん）』<sup>49)</sup>が要所で示されている。「平和への道のりとしてのケアの文化」は、ある意味で『ラウダート・シ』と『フラテッリ・トゥッティ』を凝縮したメッセージになっているとも言える。

### 3 イエス・キリストと「ケア」

#### (1) 人となった神イエス・キリスト

世界平和の日メッセージ「平和への道のりとしてのケアの文化」の中心には、人々をケアするイエス・キリストの生き方が描かれている。創造主でありケアする神が、受肉によって神の子でありケアしケアされる人間イエスとなって生き、人々の「五感」に触れる具体的、実践的な姿と生き方があって、弟子たちや後の教会に伝わり受け継がれたのである。イエスと出会ったとき青年だった弟子ヨハネは、後年の手紙でそのことを生き生きと伝える。

初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について。——この命は現れました。御父と共にあったが、わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです。——わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです。(ヨハネの手紙一1・14)

イエスの受肉の意味を、第2バチカン公会議『現代世界憲章』ではキリスト教的人間の続きに「新しい人・キリスト」として言及している。

実際、人間の神秘が真に解明されるのは、肉となったみことばの神秘においてのみである。……最後のアダムであるキリストは、父とその愛の神秘の啓示そのものをもって、人間を人間自

身に完全に示し、人間の高貴な召命を明らかにする。……「見えない神の姿」(コロサイ1・15)であるかた自身が完全な人間であり、彼は、最初の罪以来ゆがめられていた神の似姿をアダムの子らに回復させた。人間本性が、破壊されることなくキリストの中に受け入れられたことにより、われわれにおいても人間本性は崇高な尊厳にまで高められた。なぜなら、神の子は受肉によって、ある意味で自分をすべての人間と一致させたからである。彼は人間の手で働き、人間の知性をもって考え、人間の意志に従って行動し、人間の心をもって愛した。彼は処女マリアから生まれ、真にわれわれの中の一人となり、罪を除いては、すべてにおいてわれわれと同じようであった。<sup>50)</sup>

本稿第1章において、神が贖った「神の子」という新しい人間観によるいのちの尊厳が加わったことを述べたが、その贖いからさかのぼるイエスの受肉自体、人間の尊厳を高めたのである。そして、イエスが受肉したということは、人間として死を味わうのを受け入れたということでもある。それを使徒パウロは当時の「キリスト賛歌」を使いながら伝える。

キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。(フィリピの信徒への手紙2・6-8)

出発点は、イエスが真に人間であったこと、肯定的な意味でデリケートさを持ち、人間味あふれる、最も人間らしい人間となって生涯を送ったことにある。

## (2) ケアすることとケアされること

受肉したイエスが福音を告げた3年間の公生活で、どちらかといえば「ケアする」姿が顕著に表れ、種々の文書・著作で取り上げられている。何より福音書では、いわゆる「奇跡物語」の分類の中で多くの「病人のいやし」が当時の文学様式を使って多数描かれている。集約的には、福音記者マルコの場合、はじめの部分に、「人々は、病人や悪霊に取りつかれた者を皆、イエスのもとに連れて来た。……イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし、また、多くの悪霊を追い出し」(マルコ1・32-34)と簡潔に記す。また『使徒言行録』ではペトロが福音を告げる中で、「ナザレのイエスのことです。神は、聖霊と力によってこの方を油注がれた者となさいました。イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人たちをすべていやされたのですが、それは、神が御一緒だったからです」と証言している(使徒言行録10・38)。イエスのした「ケア」の数々は、ヨハネが「イエスのなさったことは、このほかにも、まだたくさんある。わたしは思う。その一つ一つを書くならば、世界もその書かれた書物を取めきれないであろう」(ヨハネによる福音書21・25)と書く

ほどである。

一方、イエスが真に人間であったという真実から忘れてはならないのは、死を味わうのを受け入れるまでにも、当然「ケアされる」人にもなったことではあるまいか。人間としてのいのちの宿ったはじめから母マリアと父ヨセフに守られ、私たちと同様に無力な「赤ん坊」として生まれ、あらゆるケアを受けて育てられたわけである。「幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれ」（ルカによる福音書2・40）ていたが、時には母マリアから「なぜこんなことをしてくれました。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです」（同2・48）とたしなめられた出来事もあった。そうしながら、「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛され」（同2・52）、「大工の息子」（マタイによる福音書13・55）として働くまで成長し、30歳のころ公生活を始めたのである。

その後も、イエスと弟子たちは多くの婦人たちの奉仕を受けて活動していたし（ルカによる福音書8・1-3）、とりわけ親友ラザロ・マルタ・マリアの兄弟を家に訪ね、イエスはお互いに打ち解けた雰囲気の中で物心のもてなしを受けた（同10・38-42）。また、宣教の道中、福音的な特別の意図があったにせよ、「旅に疲れて……水を飲ませてください」と、当時二重の意味で社会疎外の対象になっていたサマリアの女性に言わば謙虚にケアを願ったこともあった（ヨハネによる福音書4・6-7）。そして受難のさ中であっては、十字架を担ぐためにキレネ人シモンの助けを受け（マタイによる福音書27・32ほか）、聖伝ではベロニカに血に染まった顔を布で拭われ、人間として死に、最終的には丁重な葬りを受けたのである。

もう一つ、たとえ話ではあるが、イエスの愛を表すものとしてよく引用される「善いサマリア人」の物語について触れておく。ドミニコ会の宮本久雄は二通りの解釈を示す。まず、イエスが善いサマリア人のように生きたことの象徴とするもので、先述の『サルヴィフィチ・ドロリス』のように、一般的に、傷ついた人を助け隣人となって言わばケアする模範として取り上げられることが多い<sup>51)</sup>。ところがもう一つ、ユダヤ人が追いはぎに襲われ半死半生にされてサマリア人に助けられたことがイエスの象徴になっているという解釈がなされている<sup>52)</sup>。言わばケアされたこと、ケアを受け入れたユダヤ人にイエスの姿を見るというもので、示唆に富んでいる。

このように、イエスが人としてケアすることもケアされることもできたというのは、人間の苦しみを真に知っていたからといえる。そして、イエスの生死が旧約聖書の「主の僕の歌」と呼ばれる預言の実現であり救いの業であったことを、教会は、聖金曜日の典礼をはじめ種々の機会に大切に伝えている。

乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように／この人は主の前に育った。見るべき面影はなく／輝かしい風格も、好ましい容姿もない。／彼は軽蔑され、人々に見捨てられ／多くの痛みを負い、病を知っている。／彼はわたしたちに顔を隠し／わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。



／彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と。／彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。／彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。／わたしたちは羊の群れ／道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。／そのわたしたちの罪をすべて／主は彼に負わせられた。……／病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ／彼は自らを償いの献げ物とした。／彼は、子孫が末永く続くのを見る。／主の望まれることは／彼の手によって成し遂げられる。／彼は自らの苦しみの実りを見／それを知って満足する。／わたしの僕は、多くの人々が正しい者とされるために／彼らの罪を自ら負った。……／彼が自らをなげうち、死んで／罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人々の過ちを担い／背いた者のために執り成しをしたのは／この人であった。(イザヤ 53・2～12)

この預言とイエスの苦しみについて、教皇ヨハネ・パウロ2世は前述の使徒的書簡『サルヴィフィチ・ドローリス』で引用し、さらに「キリストは、ご自身で苦難を担われた」をテーマにした1994年「世界病者の日」教皇メッセージでも言及している<sup>53)</sup>。

なお、この預言の実現であったイエスの苦しみと死は確かに残酷極まりないものだったが、別の面から人間の尊厳を表すような荘厳な死でもあった。最後まで自分を殺す人々を赦し祈るイエスの死の姿は、刑事の百人隊長に「本当に、この人は神の子だった」と言わせるほどのものだったのである。

### (3) 医師と病者

第2章で扱った教皇文書やメッセージでは、主としてケアされる病者に向けた内容と、医療従事者・家族・ボランティアなど病者をケアする人々に向けた内容との両方が含まれ、その比重については場合によって異なっている。またこの章で見てきたように、ケアの根源である神は、苦しみと死、またケアすることもケアされることも知る人間イエスになった。その類比といってよいかどうか、医者とは、当然のことながら、必ずしも「不養生」をしなくても病気になるし、病気か他の原因かは別としていつかは死を迎える。つまり、専門的なケアということ言えば、たとえば、ケアする立場の医者もケアされる立場になるということである。インフォームドコンセントにおいて、患者やその家族が医者に、「先生が患者（またはその家族）だったら、（治療など）どうなさいますか」と逆に尋ねるといことがよく言われるが、一般的に患者にとっては、医学的・専門的な裏付けと理解できる説明、そして確かな治療を望むのは当然のこと、それなりに病気の体験をして患者の立場を自分のこととしてよく理解してくれる医師に対して、より信頼と安心感を抱くのではなかろうか。

もちろん、医師と病者のかかわりと同様、相手の立場を理解することは、教員と学生などすべての



人間関係において必要である。それでもなお僭越ながら、特に医師をはじめとする医療従事者にとって、患者となる体験や死と直面する体験は、不都合や苦しみがありながらもより貴重に受け止められ、闘病中あるいは回復して復帰後、それ以前とは異なる新たな視点もあろう。とりわけ、キリスト教の信仰に基づきイエス・キリストに従うことを意識しているキリスト者の医師たちは、それをイエス・キリストの死と復活の類比として捉えることができるのではなかろうか。

#### 4 いのちと平和を守る「ケアの文化」

教皇フランシスコは、2019年11月、ヨハネ・パウロ2世以来38年ぶり2回目の教皇訪日を果たした。このとき日本司教団の選んだテーマは、2015年の回勅『ラウダート・シ』巻末の祈りから取られた「すべてのいのちを守るため」であり<sup>54)</sup>、教皇はビデオ・メッセージで来日前のコメントを送っている。

わたしの訪問に際して選ばれたテーマは「すべてのいのちを守るため」です。あらゆる人の価値と尊厳を守るという、わたしたちの心に響くこの本能的な強い思いは、現代世界が直面している平和的な共存を脅かす脅威なのです。……皆さんの国は、戦争がもたらす苦しみについて、よく知っています。人類の歴史において核兵器による破壊が二度と行われぬよう、皆さんとともに祈ります。核兵器の使用は、倫理に反します。また、対話の文化と兄弟愛の文化がもつ重要性も、皆さんはご存じです。とくに、異なる宗教との対話は、隔てを乗り越える助けとなります。人間の尊厳への尊重を促進し、すべての国に全人的な発展をもたらすものです。わたしの訪問が、後退せずに持続する揺るぎない平和へと導く、互いの尊重と出会いという道を皆さんが歩む励みとなることを期待しています。平和は美しいものであり、それが本当の平和なら、失うことのないよう、必死で守るべきものです。<sup>55)</sup>

ここには、いのち・人間の尊厳・平和といったキーワード、また「対話の文化と兄弟愛の文化」という言葉が入っている。ここに「ケアの文化」の言葉はないが、その概念も一貫して流れていると見てよいだろう。世界各地を司牧訪問している教皇にとって、この日本訪問がパンデミック前では最後の外国訪問となったのだが、短期間に重要な地を訪問し、テーマが含む内容を広く訴えるメッセージを残して回った。

「ケアの文化」が回勅『ラウダート・シ』で扱われていることははじめに触れたが、第231項の次の箇所である。

相互配慮のささやかな言動を通してあふれ出る愛はまた、市民性にも政治性にも見られるもの

でもあり、よりよい世界を造ろうとする一つ一つの行為において感じられます。社会に向かう愛と共通善への取り組みは、個人間のかかわりだけではなく「広範な関係（社会、経済、政治）」にも影響する愛徳の傑出した表現です。それゆえ教会は、「愛の文明」という理念を世界に示したのです。社会に向かう愛は真の発展への鍵です。「社会をより人間的に、より人間にふさわしいものにするためには、政治、経済、文化の各レベルにおける社会生活の中で、愛を再評価し、すべての活動においてつねにもっとも権威ある規律とする必要があります」。こうした枠組みの中で、社会に向かう愛は、日々のささやかな言動を重視しつつ、環境悪化を食い止め、また「ケアの文化」を促進し社会全体に浸透させる、もっと人掛かりな戦略を考案するようにとわたしたちを駆り立てます。社会のこうした力強い動きに、他の人々と一緒に加わるよう神から呼ばれていると感じるときは、それもまたわたしたちの霊性の一面であると認識すべきです。それは、愛徳の実践であり、それ自体がわたしたちを成熟させ聖化してくれるものです。<sup>56)</sup>

なお、「ケアの文化」という訳語を含め、「総合的なエコロジー」、またケアと深くかかわる「生活の質」という3つの訳出にあたって、『ラウダート・シ』の翻訳者が苦慮したことを説明している。「ケアの文化」という日本語訳については、次のように解説している。

一つ目は、回勅のサブタイトルにも含まれ、そこでは「大切にする」と訳出されている care という語の邦訳に纏わる難しさについてです、「配慮する」「気遣う」「心にかける」「世話をする」等の意味を有するこの語に、統一した日本語表現をあてがうことは諦めざるを得ませんでした。これまでの教皇方が「対話の文化」や「いのちの文化」と命名して指し示してこられた文化刷新の方位に加えて、現教皇が今回勅の締め括り部分で言及なさる culture of care を「ケアの文化」とさせていただいた主な理由もそこにあります。すでに多方面で使用されているケアというカタカナ表記が特定の既成概念のお仕着せとならぬよう、祈るばかりです。<sup>57)</sup>

ここで『ラウダート・シ』の翻訳者は、「ケア」という定着したカタカナ表記のために概念が狭められることのないようにと祈る。あわせて、回勅のキーワード「総合的なエコロジー」と訳出された修飾語の integral については、何より「全人的な」と訳出されて然るべき語でもあり、「全人性」を強調するカトリック教会の姿勢を読み取るよう願っている<sup>58)</sup>。さらに、三つ目の「生活の質」と訳出された quality of life は、狭義のケアにおけるキーワードと言えるが、翻訳者には「人間学」的な、より根源的な意識もあったという<sup>59)</sup>。なお、回勅『フラテリ・トゥッティ』について現在公開されている日本語試訳では、「ケア」に当たる言葉がほぼ「大切にする」、「世話する」と訳されている。

このように、「ケアの文化」は、病者の生活のケアをはじめ個人的なささやかな言動から、全人的な

人間が生きる環境のケアまで含む広い概念になっている。ちなみに、2021年からは「国連生態系回復の10年」が記念されている<sup>60)</sup>。そして、回勅『ラウダート・シ』の元となったアッシジの聖フランシスコが、この「太陽の歌」とともに「平和の祈り」でも親しまれていること、ケアの文化が「世界平和の日」に扱われていることを今一度想起したい。「ケアの文化」は、すなわちすべてのいのちと平和を守る文化として呼びかけられているのである。

## おわりに

「ケアの文化」の基礎となる人間といのちの尊厳をあらためて確認し、狭義での病者のケアをめぐる教皇メッセージから広義の「ケアの文化」に至るメッセージを概観し、神が人間イエスになったというキリスト教的視点も加えて、いのちと平和を守る「ケアの文化」について考察してきた。

今後、「ケアの文化」にかかわりのある実践と推進力のヒントとなるモデルを探究してみたい。その際、第3章で提起したように、キリスト者である医師に注目する。イエス・キリストを知り、ケアすることもケアされることも知り、そして、個人的にも職業的にもいのちに対する感受性と当事者意識をもって、自分自身と目前の一人の病者のケアから広く環境、平和のケアへの視野と展望を指し示してくれる医師である。

医療活動・平和活動と執筆活動によって国内外で一般にもよく知られ、ほぼ生涯現役で人生を完結し、関係資料の面からも具体的に想起される3人がいる。カトリックのキリスト者として永井隆医師（1908年2月3日・島根～1951年5月1日・長崎）<sup>61)</sup>、プロテスタントのキリスト者として日野原重明医師（1911年10月4日・山口～2017年7月18日・東京）<sup>62)</sup>、そして、中村哲医師（1946年9月15日・福岡～2019年12月4日・アフガニスタン）<sup>63)</sup>である。永井隆は、2021年が帰天70年の記念である。永井医師と日野原医師の生年は3年違いだが、永井は43歳の若さ、日野原は105歳の長寿であった。ふたりとも戦争体験を経、医師としての活動のみならず平和を訴える活動にもおよび、多くの著作を残し、その生涯と著作には、理論的にも実践的にも結実したキリスト者としての信仰が表現されている。中村医師については、アフガニスタンの復興支援さ中に武装集団の凶弾に倒れたことがまだ人々の記憶に新しい。パキスタンに山岳会遠征隊の同行医師として短期間初入国、1984年にはJOCS日本キリスト教海外医療協力会のワーカーとしてペシャワールのミッション病院ハンセン病棟に赴任、その後、固有の設立団体の支援のもとパキスタンとアフガニスタンの活動に文字通り命を捧げた。

いずれも明確で一貫性のあることばと行いとで、いのちの尊厳とイエス・キリストを告げ知らせた人と言える。このいのちをかけたメッセージを受けとめ、イエス・キリストへの信仰と平和希求の遺志を受け継いでいくためにも、それらの人々の生涯をたどっていくことを今後の課題として本稿を擧筆する。

## 脚注

- 1) カトリック中央協議会ホームページ「日本の教会における祈願日等の解説」に、各祈願日の解説と教皇メッセージのリンクが掲載されている。  
<https://www.cbcj.catholic.jp/calendar/kiganbi/>
- 2) 第54回「世界平和の日」教皇メッセージ（2021年1月1日）「平和への道のりとしてのケアの文化」、  
<https://www.cbcj.catholic.jp/2020/12/25/21870/>
- 3) 教皇フランシスコ回勅（瀬本正之・吉川まみ訳）『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に』カトリック中央協議会、2016年。
- 4) 和田幹男「旧約聖書における人間観——神に『かたどり』『似せて』の意味——」、岸英司編『宗教の人間学』世界思想社、1994年、47-63頁、および和田幹男『創世記を読む』筑摩書房、1990年を参照。  
なお、第2バチカン公会議の重要な文書に、現代世界と教会との関係を主題とする『現代世界憲章』（1965年12月7日公布、略号GS）があり、キリスト教の人間観も含んでいる。第一部 教会と人間の召命、第一章が人格の尊厳を扱っており、第12項「神の像である人間」には、「人間は『神の像』として造られ、造り主を知りかつ愛することができる。また造り主から地上の全被造物の主人として立てられたが、それは、それらを支配しかつ用いて神の栄光をたたえるためであった。……神は人間を単独なものとして造ったのではない。……人間はその本性の内奥から社会的存在であり、他者とのかかわりなしには生きることも資質を開花させることもできない」と述べる（『第二バチカン公会議公文書 改訂公式訳』カトリック中央協議会、2013年、611-612頁）。
- 5) 前掲「平和への道のりとしてのケアの文化」2、および『ラウダート・シ』67、参照。
- 6) GS第14項「人間の構成」は、人間が「肉体と霊魂とが一体となったものであり、その肉体的諸条件を通して物質界の諸要素を自分の中に凝集」していると説く。すなわち、まず体については「肉体的生命を軽んじることは許されない」こと、「肉体は神によって造られ、終わりの日に復活させられるものであり、したがってそれはよいもの、尊敬に値するものとして受け止めなければならない」ことが確認される。しかし人間は、「物体的なものより優れていると認め、単に自然の一部または人間社会の無名の構成要素ではない……その内面性によって事物の世界を超越している。……心を探る神はそこで人間を待ち、人間は神のまなざしのもとで自らの行方を定め……自分の中に霊的な不滅の霊魂を認める……、人間は単なる物質的・社会的条件に由来する幻想にもあそばれているのではなく、かえって実在の深い真理そのものに達する」と述べる（前掲、613頁）。
- 7) 前掲「平和への道のりとしてのケアの文化」2、および『ラウダート・シ』70、91-92、参照。
- 8) GS第18項「死の神秘」では、「人間の中にある永遠性の種」、「人間の心に深く根づいている後世のいのちへの願望」を認める。そして教会は、「神は人間を地上の悲惨の限界を超えた幸福な目的のために創造したこと」、「自分の責任で失われた完全さが全能であわれみ深い救い主によって再び人間に返されるとき、その死も打ち負かされる」こと、「神は、人間がその全存在を挙げて、永遠にして朽ちることのないご自分のいのちの交わりにあずかるよう人間を召されたし、なおも召されている」こと、また「すでに死者となった親愛なる兄弟たちと、キリストにおいて交わる可能性」と「彼らが神のもとでまことのいのちを得ているとの希望」を提示している（前掲、616-617頁）。
- 9) 神山復生病院は、1886（明治19）年パリ外国宣教会のジェルマン・レジェ・テストウイド神父（1849～1891）が宣教の中一人のハンセン病者と出会い、社会で放置された同病者の救済を思い立ち、御殿場の鮎沢村（現在の御殿場市新橋）に家屋を借用して6名の患者を収容したことから始まった。ハンセン病への理解とそこで生きてきた人々の歴史を後世に残すために、初期から使用、保存されてきた建物を記念館として開館して資料を展示している。一方、現代のニーズに応え、2002年にはホスピスと療養病棟を持つ病院と



して生まれ変わり、2017年には小規模多機能型居宅介護事業所と訪問看護ステーションを開設、2019年4月から療養病棟は介護医療院として新たにスタートしている（同病院ホームページ <https://www.fukusei.jp/>参照）。

岩下壯一は、1930（昭和5）年11月東京大司教の任命で神山復生病院六代目院長に就任、就任と同時に病院の改善計画を立て、病院を財団法人に改め、全生病院を見学、便所の水洗、水道の完成、グラウンドの完成、消毒設備の完備、職員宿舎、手術室、診療室の増改築などを行うほか、脱走防止のためレクリエーションに野球試合などスポーツを工夫したりもした。この頃の婦長が、通称堀、井深八重である。患者たちは岩下を「うちのオヤジ」と呼んで慕った。拙稿「岩下壯一における真理の探究——日本人とドミニコ会的靈性の接点についての一考察」聖カタリナ大学聖カタリナ大学短期大学部『研究紀要』第23号、2011年、21-42頁、および「岩下壯一における福音的愛の源泉」同『研究紀要』第24号、2012年、39-60頁を参照されたい。

- 10) 今道友信『超越への指標』ピケナス出版、2008年、「捨ててはならないもの」、458-459頁。
  - 11) 同上、459-460頁。
  - 12) 同上、460頁。
  - 13) 教皇ヨハネ・パウロ2世／内山恵介訳 使徒的書簡『サルヴィフィチ・ドロリス——苦しみのキリスト教的意味——』サンパウロ、1988年（2005年2版）。
  - 14) 1858年2月11日、フランスのルルド近郊のマッサビエールの洞窟で、無原罪の聖母がベルナデッタに初めて現れた。それ以降、7月16日まで18回にわたって聖母が出現し、2月25日の出現の際にはベルナデッタが聖母の言われるままに洞窟を掘って湧き出た濁った水を飲み、その後泉の水が澄んで豊かに湧き出、その水によって奇跡的な治癒が続いて今に至っている（出現中にすでに7件、現在までに医学審査委員会によって正式に奇跡として認可されただけでも70件だが、実際は数えきれないほどある）。ベルナデッタへの一連のマリア出現と奇跡的な治癒は、1862年に教会当局によって神聖なものとして承認され、ルルドが国際的な巡礼地、とりわけ傷病者の巡礼地になった。ルルドと傷病・医療・福祉・ケア・癒し・ホスピス等の関連についての最近の研究として、須沢かおり「人生の終わりへの希望——ルルドに見る全人的ケア・癒し・共生——」ノートルダム清心女子大学『キリスト教文化研究所年報』第42号、2021年、37-62頁の講演録がある。この講演は、2019年6月8日にカトリック大学キリスト教文化研究所協議会の2019年度第32回連絡会議における基調講演として行われ、同協議会報『Communicatio』第16号に編集掲載され、講演の半年後に帰天した須沢氏の遺稿となったため、追悼を込めて転載されたものである。エディットシュタイン研究で著名だった氏が、近年はルルドの聖母のオスピタリテの会員としてルルド研究に実践的に携わってきた貴重な研究成果になっている。
- また、現教皇フランシスコは、2017年の第25回「世界病者の日」メッセージでこの出来事と聖ベルナデッタに触れている。<https://www.cbcj.catholic.jp/2017/02/11/12049/>
- 15) 前掲、教皇ヨハネ・パウロ2世使徒的書簡『サルヴィフィチ・ドロリス』1、6頁。
  - 16) 同上、16、48-53頁。
  - 17) 同上、116-131頁。
  - 18) 同上、31、132頁。
  - 19) Carta apostólica en forma de motu proprio, *Dolentium Hominum*, del Sumo Pontífice Juan Pablo II, Institución de la Pontificia Comisión para la Pastoral de los Agentes Sanitarios.
  - 20) Carta del Santo Padre Juan Pablo II, al Cardenal Fiorenzo Angelini, Presidente del Consejo Pontificio para la Pastoral de los Agentes Sanitarios, con ocasión de *La Institución de la Jornada Mundial del Enfermo*.
  - 21) 前掲、カトリック中央協議会ホームページ「日本の教会における祈願日等の解説」の「世界病者の日」



<https://www.cbcj.catholic.jp/calendar/kiganbi/>

- 22) 1994「世界病者の日」教皇メッセージ「キリストは、ご自身で苦難を担われた」1、  
<https://www.cbcj.catholic.jp/1993/12/08/7727/>
- 23) 同上、7。
- 24) 同上、9。
- 25) 第21回世界病者の日（2013年2月11日）教皇メッセージ「行って、あなたも同じようにしなさい」（ルカ10・37）2、<https://www.cbcj.catholic.jp/2013/02/11/1802/>
- 26) 同上、5。なお、教皇ベネディクト16世による諸文書は際立って神学的とよく言われ、世界病者の日メッセージも、毎年病者に関する一定のテーマを決めて神学的に展開されている傾向に思われる。しかし、高齢で教皇に選出されてから8年、辞意表明の直前とも言えるこのメッセージは、後の経過を知ったうえで読むからかもしれないが、どちらかと言えば病者に軸足を置く情緒的な印象を受ける。
- 27) 就任から半年後の教皇フランシスコインタビュー「教会は野戦病院であれ」、『中央公論』2014年1月号所収。59頁では、「私ははっきりと見ます。教会が今日最も必要とすることは、傷を癒す能力です。信ずる人たちの心を温める力です。身近さと親しさです。教会は戦闘後方の野戦病院だと思います。重い傷を受けた人に、コレステロールや血糖値を尋ねるほど無意味なことはありません。まず傷ついた人々を癒すことをなすべきなのです。その後で、残りのことを話せるようになるのです。傷を癒す、傷を癒す……、低い下から始めるべきなのです」と話している。
- 「野戦病院」としての教会のイメージについては折に触れて言及されている。何よりもイエス自身についてマルコ福音書1章をもとに、「ある安息日に、カファルナウムの町は『野戦病院』のようになりました。日が沈むと、人々は病人をイエスのもとに連れて行き、イエスはそれらの人々をいやしました」（2020年11月4日一般謁見演説）と述べ、また初代教会について「使徒言行録5章の中では、生まれたばかりの教会が病者というもっとも弱い人々を受け入れる『野戦病院』のように描かれています」（2019年8月28日一般謁見演説）と説いている。また、現代の狭義の「野戦病院」として、第26回「世界病者の日」教皇メッセージでは「ひん死のけが人をすべて受け入れる『野戦病院』という教会のイメージは、実際に現実のものとなっています。宣教会や教区の病院だけが人々に必要な治療を施している地域が世界中にいくつもあるのです」と述べ、広義には「いのちの福音を告げるといことは……傷をいやし、和解とゆるしの道をつねに差し出す準備のある、野戦病院となることです」（教皇の日本司牧訪問ミサ説教、11月25日東京ドーム）と、教会の宣教活動の使命が、現代社会のいのちと癒しに関わる課題に最前線で取り組むことにあると訴えている。
- 28) 第22回世界病者の日（2014年2月11日）教皇メッセージ「信仰と愛——『わたしたちも兄弟のためにいのちを捨てるべきです』（一ヨハネ3・16）」、<https://www.cbcj.catholic.jp/2014/02/11/7719/>
- 29) セルヒオ・ルビン フランチェスカ・アンブロジーネティ / 八重樫克彦 八重樫由貴子訳『教皇フランシスコとの対話——みずからの言葉で語る生活と意見』新教出版社、2014年、46-47、57頁、および、オースティン・アイヴァリー / 宮崎修二訳『教皇フランシスコ キリストとともに燃えて——偉大なる改革者の人と思想——』明石書店、2016年、89-92頁および57頁、参照。
- 30) 第25回「世界病者の日」教皇メッセージ「神が成し遂げられたことへの驚き——『力あるかたが、わたしに偉大なことをなさいましたから』（ルカ1・49）」、<https://www.cbcj.catholic.jp/2017/02/11/12049/>
- 31) 第27回「世界病者の日」教皇メッセージ「ただで受けたのだから、ただで与えなさい」（マタイ10・8）、<https://www.cbcj.catholic.jp/2019/01/28/18395/>
- 32) 2020年第28回「世界病者の日」教皇メッセージ「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」（マタイ11・28）、<https://www.cbcj.catholic.jp/2020/01/27/20081/>

33) 2021 年第 29 回「世界病者の日」教皇メッセージ「『あなたがたの師は一人だけで、あとは皆兄弟なのだ』  
(マタイ 23・8) ——病者へのケアの基盤である信頼関係」、3、  
<https://www.cbcj.catholic.jp/2021/01/29/22035/>

34) 同上、4。

35) 「教皇、ジェメツリ病院にお礼の手紙」バチカンニュースホームページ  
<https://www.vaticannews.va/ja/pope/news/2021-07/il-papa-lettera-ringraziamento-al-policlinico-gemelli.html>

なお、退院前の 11 日には、日曜日恒例の「お告げの祈り」を病院の 10 階バルコニーから小児科病棟で  
がんと闘うこどもたち 3 人と一緒に行い、メッセージを送った。同病院は、教皇・ヨハネ・パウロ 2 世が  
1981 年の狙撃事件以来何度も入退院を繰り返し、24 回にわたり祈りを司式してきたことから「第 3 のバチ  
カン」と愛称を付けた場所である。

教皇フランシスコは、約 2 か月後にはハンガリーとスロバキアの外国司牧訪問を行い、記者が「手術が素  
晴らしい効果をもたらし若返った」とコメントしたのに対して、「でも、私の受けた手術は美容のためのも  
のではありませんでしたよ」と、いつものユーモアで答えた。

36) 前掲、カトリック中央協議会ホームページ「日本の教会における祈願日等の解説」の「世界平和の日」  
<https://www.cbcj.catholic.jp/calendar/kiganbi/>

37) 前掲注 2、1。

38) 同上。

39) 同上。

40) 同上、2。

41) 同上、3。

42) 同上、4。

43) 同上、5。

44) 同上、6。

45) 同上。

46) 同上、7。

47) 同上、8。

48) 同上、9。

49) 教皇フランシスコ回勅『兄弟の皆さん』カトリック中央協議会、2021 年。

なお、この回勅 248 項では広島・長崎の原爆に言及し、訪日時 2019 年 11 月 24 日、広島平和記念講演で  
行われた平和のための集いのメッセージが引用されている (186-187 頁)。

50) GS 第 22 項「新しい人・キリスト」、前掲『第二バチカン公会議公文書 改訂公式訳』、621-623 頁。

51) 前掲回勅『兄弟の皆さん』第 2 章は「道端の異邦人」と題し、56 項から 86 項にかけて、丁寧な釈義、解説、  
招きの言葉が展開されている (前掲書、51-74 頁)。

52) 宮本久雄「イエスの譬え話」、宮本久雄・山本巍・大貫隆『聖書の言語を超えて』、140-156 頁、参照。

53) 前掲『サルヴィフィチ・ドロリス』17-19、44-61 頁、参照。および、前掲 1994「世界病者の日」教皇メッ  
セージ「キリストは、ご自身で苦難を担われた」3、<https://www.cbcj.catholic.jp/1993/12/08/7727/>

54) 「被造物とともにささげるキリスト者の祈り」最後 2 節の以下の中に、「すべてのいのちを守るため」の言  
葉がある。

愛の神よ、／地球上のすべての被造物へのあなたの愛の道具として、／この世界でのわたしたちの役割  
をお示してください。／あなたに忘れ去られるものは何一つないからです。／無関心の罪に陥らせず、／

共通善を愛し、弱い人々を支え、／わたしたちの住むこの世界を大切にできるよう、／権力や財力をもつ人々を照らしてください。／貧しい人々と地球とが叫んでいます。／おお、主よ、／すべてのいのちを守るため、／よりよい未来をひらくため、／あなたの力と光でわたしたちをとらえてください。／正義と平和と愛と美が支配する、あなたのみ国の到来のために。／あなたはたたえられますように。／アーメン。

前掲注 3、『ラウダート・シ』、210-213 頁。

55) 「旅行前のビデオ・メッセージ」、カトリック中央協議会出版部編『すべてのいのちを守るため——教皇フランシスコ訪日講話集』カトリック中央協議会、2020 年、7-8 頁。

56) 前掲注 3、『ラウダート・シ』、194-195 頁。

57) 同上、232 頁。

58) 同上、233 頁。

59) 同上、234-235 頁。

60) 「WHO:『国連生態系回復の 10 年』に加盟」、日本 WHO 協会ホームページ、<https://japan-who.or.jp/news-releases/2106-11/>。なお、教皇フランシスコはその開始の際に国連環境計画と国連食糧農業機関に宛ててメッセージを送った。バチカンニュースホームページ、<https://www.vaticannews.va/ja/pope/news/2021-06/message-for-launching-un-decade-on-ecosystem-restoration.html>

61) 永井医師自身の著書は、多くが被爆後に如己堂の病床でも書き続けられが、伝記として、片岡弥吉『永井隆の生涯』サンパウロ、1961 年。また長男による、永井誠一『永井隆——長崎の原爆に直撃された放射線専門医師』サンパウロ、2000 年。

62) 多様な分野の数々の著作があるが、「最期の著作」(帯の言葉)である日野原重明『生きていくあなたへ——105 歳どうしても遺したかった言葉』幻冬舎文庫、2020 年。また、子どもたちにも向けた「104 歳の医師が見つめた戦争と未来へのメッセージ」(帯の言葉)、日野原重明『戦争といのちと聖路加国際病院ものがたり』小学館、2015 年をここに挙げておく。

63) 中村医師は、著作もあるが、講演(録)・ニュースやインタビュー等各種記事・ドキュメンタリー番組や所属団体の会報などの情報も多数。没後ペシャワール会の協力で編集され出版されたものとして、中村哲『希望の一滴——中村哲、アフガン最期の言葉』西日本新聞社、2020 年。